



TITLE:

3.研究会(III 共同利用研究)

AUTHOR(S):

CITATION:

3.研究会(III 共同利用研究). 霊長類研究所年報 1974, 3: 60-63

ISSUE DATE:

1974-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162488>

RIGHT:

した。

なお、オペラント形成手続きに入ってから、実験中にもちいる100個の大豆(約37g)以外には水しか与えなかったが、体重が80%に到ったのは、減量開始後25~30日目であった。80%到達後は、実験終了後個室ケージで固形飼料を補給したが、80~85%点に体重を維持するには、体重の約1%に相当する量の固形飼料を与える必要があった。

下記の方々は原稿未着につき、研究題目、氏名のみを記させていただきます。

北限のニホンザルの生活維持と生活環境(設定課題1)

森 治(大間小)

視覚性学習行動における中視覚系の単位ニューロン活動(設定課題5)

有国富夫(阪大・医)

ニホンザルの遊動生活(自由課題)

好広真一(京大・理)

霊長類の咀嚼器官の形態と咀嚼運動の様式に関する研究(自由課題)

石塚正弘(北大・歯)

3. 研 究 会

ニホンザルの現況—分布と保護について

期 日: 1972年7月1日~3日

参加者: 約40名

この研究会は研究の成果よりも研究の前提条件にかかわり、今後の成果を確保しうる道への模索を重視する。ことの起こりは、1972年3月、日本モンキー・センター主催のプリマーテス研究会のさいにもたれた何人かのフィールドワーカー達の話し合いであった。これを発端に研究所外の研究者からの強い熱心な希望があり、それに答える形で当研究所の共同利用研究の一環としての研究会が組まれた。

当初の呼びかけの趣旨を、私達なりの理解にしたがってあらわせばおよそ次のようなことになる。

この国で霊長類の研究を成り立たしめている自然史的要素は、この国土に endemic なニホンザルという種がいるという事実であり、ニホンザルの種、とくに自然個体群の維持は霊長類研究の前提でなければならぬ。この意味からしても、ニホンザルの自然保護は、霊長類研究者の共有の課題であり、研究者の担うべき社会的責任である。

実際には、日本の自然環境の破壊、農山村の荒廃、観光開発、奥地の山林の開発などが進むなかで、ニホンザルの生息環境は急激に変化し、種としての生存条件もあやうくなりつつある。近年、フィールドでの研究者の誰しにも、自らの研究対象として選んだ個々の群れ、あるいは地域個体群の保護の問題が重くのしかかってきており、それぞれに乏しい知恵をしぼりながら、研究に注ぐと同等、ときには大半の精力を研究対象の維持に注ぎざるをえないのが現状であろう。それらの努力は必ずしも成功しているとはいえないし、限られた数の関係する個

々の研究者の手にあまる難問であることも確かである。

日本産哺乳動物のなかで、学問が注いできたエネルギーと情報の集積量のもっとも多い種の一つがニホンザルである。種の分布域全体にわたって各地の状況を集成し(分布、個体群、生息地の環境条件の現況を正確におさえ、変動の方向を予測すること、つまり種の現況の把握)見取図を描く作業も、ニホンザルを手がかりに大哺乳動物の保護の基礎理論をきたえ上げること、現在ならば期待できるであろう。

ニホンザル研究の主流は、餌付け下の群れの<社会学>であったが、最近ようやく群れを越えた拡がりをもちつつ、森林内の一構成員としてのニホンザルをとらえようとする<社会生態学>をめざした研究が展開を始めようとしている。一方、餌付け群についても長期の歴史的追跡が真価を発揮し出した。研究上の要請からしても、研究内容のよりしっかりした裏付けを伴って、研究対象の維持=自然保護の問題が切実な課題として意識されうる内的必然性が生まれつつある。

自然保護はすぐれて個別地域的な課題である。問題は個々の地域の事情に応じて、具体的な解決策を積み重ねてゆかねばならぬ性質のものである。自然破壊はその根を画一的な動因にもちながら、現われる姿はそれぞれの土地の自然と社会のありようによって異なる。しかし、それはそれとして、個別の姿を深く掘り下げれば、一般的な法則、病根にたどりつきうるであろう。そこに個々の地域個別群の問題を越えて、研究者の共通の努力の成立しうる基礎がある。

研究会の内容は、以下にみられるように盛り沢山になった。個々の群れが抱えている問題は多面的かつ深刻であることは、各地の報告を通して明白であった。ただ、時間が限られたため具体的ケースについての掘り下げた意見の交換には欠けるうらみがあった。

第1日

研究会の趣旨説明：東 滋（京大・霊長研）・鈴木 晃（京大・霊長研）、志賀高原地獄谷：常田 英士（地獄谷野猿公苑）、湯河原：村松正敏（マカク研）、福井・滋賀：川村 俊蔵（京大・霊長研）、高崎山：西邨 顯達（京大・霊長研）、嵐山：乗越 皓司（大阪市大・理）、幸島：森梅代（京大・霊長研）、臥牛山：古屋 義男（静岡女子大）、日光：三浦 慎悟（東京農工大・農）、霊仙山：大沢秀行（京大・霊長研）、帝釈峽：増井憲一（京大・理）、香春岳：岩本俊孝（九大・理）、勝山：藤井尚教（阪大・文）、都井岬：東 滋、屋久島：東 滋。

第2日

下北の調査報告：森 治（大間小学校）・東 滋・足沢貞成（京大・霊長研）、房総の調査報告：岩野 泰三（東大・理）・上原重男（京大・理）・高杉欣一（東大・農）、日本野猿愛護連盟の歴史と総括：広瀬 鎮（日本モンキー・センター）、各地の現状報告—鳥取：水原 洋城（日本モンキー・センター）、餌場および餌付けをめぐる諸問題。

第3日

餌付け群での奇型個体の発見・原因等の問題、研究会の今後の進め方。

これらの討論から多数の論点があき出した。とくに、餌付け群に関しては餌付けによる個体数の増大が population problem としてのみ取り上げられがちであるが、実は管理の理念、経営の方向づけ、経営のあり方の問題が伏在していること、さらに餌付けと同時に生息環境の破壊が進行したことを見落してはならぬこと、これらを含めたトータルな問題として、餌付け群の生態管理のあるべき方向を考えるために資料を整備する必要などが指摘された。

従来の一般的すう勢は、鳥獣行政の一環として、餌付けによる〈保護〉ラインがしかれ観光利用と密着し、それに財政的基盤を依存する形で〈餌付け〉が進められた。ニホンザルの保護といえは〈餌付け〉すればよいという短絡した安上りの考え方が社会的に定着してしまった感がある。

その一方で、ニホンザルの生息環境のもっとも安定した部分を占めていた奥地天然林の破壊が、これまた国策として急速に進行した。これらの結果は、多少のタイム・ラグと集積効果を伴ってすでに、あるいは今後も現われつつあるであろう。このような情況のなかで、ニホンザル、ひいては陸棲の中・大型哺乳動物とヒトとの関係をどう考えてゆくべきであるのか、本研究会の課題はおそらくそこまでゆきつかねばならない。その作業に耐えるだけの着実な資料と討論を積み重ねてゆくための一つ

の場として、この研究会は発足をみた。共有の課題であるという認識は参加者のそれぞれのうちに深められたことであろう。

研究会形式としては初めての試みであり準備、運営の上で不手ぎわは多々あった。それにもかかわらず初回から白熱の論議が展開された。参加者諸氏の熱意に支えられて、ともかく第1回の会合を終えることができた。すべては、今後の歩みにかかっている。

（文責 東 滋）

行動観察の基本的方法と記述の客観化

期 日：第1回 1972年10月9日

第2回 〃 12月9日

第3回 1973年2月5日

第4回 〃 3月19日

参加者（固定メンバーのみ）

榎本知郎（京大・自然人類）、乗越皓司、西田憲市（以上大阪市大・生物）、水原洋城、都守淳夫（以上、日本モンキー・センター）、糸魚川直祐、鶴飼信行、南徹弘、山口勝機、藤井尚教、杉野欽吾、黒川多嘉子、八島多恵子、早川淳、曾我部 宏（以上、阪大・心理）、浅見千鶴子（お茶の水女子大・家政）、岡野恒也（静岡大）、佐木良子、坂本文子（以上、明星大）、室伏 靖子、井深允子、浅野俊夫、西邨 顯達、森 梅代（以上、京大・霊長研）。

以上の他に所外および所内より数名が随時参加した。

この研究会は前年度（46年度）からの継続であり、メンバーも前年度と殆ど同じであった。前年度の5回の研究会の総括（年報 Vol. 2 参照）の上になつて、今年度は共通のテーマに沿って行なつた。テーマは「母子関係」で、第1回の研究会終了後、参加者にアンケートを出して決めた。研究会の報告は別に印刷中であり、ここには発表題目と発表者のみをあげておく。

第1回

糸魚川：勝山集団のオスの行動について

第2回

母子関係 (1)

①室伏・井深・西邨：R.A. Hinde 達の研究紹介

②南：H.F. Harlow 達の研究紹介

第3回

母子関係 (2)

①岡野・佐木・坂本：ニホンザルの飼育集団における親子間の心理学的考察（多摩動物園サル山における観察）

②黒川：勝山野生ニホンザル集団における幼体と集

第1日

研究会の趣旨説明：東 滋（京大・霊長研）・鈴木 晃（京大・霊長研）、志賀高原地獄谷：常田 英士（地獄谷野猿公苑）、湯河原：村松正敏（マカク研）、福井・滋賀：川村 俊蔵（京大・霊長研）、高崎山：西邨 顯達（京大・霊長研）、嵐山：乗越 皓司（大阪市大・理）、幸島：森梅代（京大・霊長研）、臥牛山：古屋 義男（静岡女子大）、日光：三浦 慎悟（東京農工大・農）、霊仙山：大沢秀行（京大・霊長研）、帝釈峽：増井憲一（京大・理）、香春岳：岩本俊孝（九大・理）、勝山：藤井尚教（阪大・文）、都井岬：東 滋、屋久島：東 滋。

第2日

下北の調査報告：森 治（大間小学校）・東 滋・足沢貞成（京大・霊長研）、房総の調査報告：岩野 泰三（東大・理）・上原重男（京大・理）・高杉欣一（東大・農）、日本野猿愛護連盟の歴史と総括：広瀬 鎮（日本モンキー・センター）、各地の現状報告—鳥取：水原 洋城（日本モンキー・センター）、餌場および餌付けをめぐる諸問題。

第3日

餌付け群での奇型個体の発見・原因等の問題、研究会の今後の進め方。

これらの討論から多数の論点がふき出した。とくに、餌付け群に関しては餌付けによる個体数の増大が population problem としてのみ取り上げられがちであるが、実は管理の理念、経営の方向づけ、経営のあり方の問題が伏在していること、さらに餌付けと同時に生息環境の破壊が進行したことを見落してはならぬこと、これらを含めたトータルな問題として、餌付け群の生態管理のあるべき方向を考えるために資料を整備する必要などが指摘された。

従来の一般的すう勢は、鳥獣行政の一環として、餌付けによる<保護>ラインがしかれ観光利用と密着し、それに財政的基盤を依存する形で<餌付け>が進められた。ニホンザルの保護といえど餌付けすべしという短絡した安上りの考え方が社会的に定着してしまった感がある。

その一方で、ニホンザルの生息環境のもっとも安定した部分を占めていた奥地天然林の破壊が、これまた国策として急速に進行した。これらの結果は、多少のタイム・ラグと集積効果を伴ってすでに、あるいは今後も現われつつあるであろう。このような情況のなかで、ニホンザル、ひいては陸棲の中・大型哺乳動物とヒトとの関係をどう考えてゆくべきであるのか、本研究会の課題はおそらくそこまでゆきつかねばならない。その作業に耐えるだけの着実な資料と討論を積み重ねてゆくための一つ

の場として、この研究会は発足をみた。共有の課題であるという認識は参加者のそれぞれのうちに深められたことであろう。

研究会形式としては初めての試みであり準備、運営の上で不手ぎわは多々あった。それにもかかわらず初回から白熱の論議が展開された。参加者諸氏の熱意に支えられて、ともかく第1回の会合を終えることができた。すべては、今後の歩みにかかっている。

（文責 東 滋）

行動観察の基本的方法と記述の客観化

期 日：第1回 1972年10月9日

第2回 〃 12月9日

第3回 1973年2月5日

第4回 〃 3月19日

参加者（固定メンバーのみ）

榎本知郎（京大・自然人類）、乗越皓司、西田憲市（以上大阪市大・生物）、水原洋城、都守淳夫（以上、日本モンキー・センター）、糸魚川直祐、鶴飼信行、南徹弘、山口勝機、藤井尚教、杉野欽吾、黒川多嘉子、八島多恵子、早川淳、曾我部 宏（以上、阪大・心理）、浅見千鶴子（お茶の水女子大・家政）、岡野恒也（静岡大）、佐木良子、坂本文子（以上、明星大）、室伏 靖子、井深允子、浅野俊夫、西邨 顯達、森 梅代（以上、京大・霊長研）。

以上の他に所外および所内より数名が随時参加した。

この研究会は前年度（46年度）からの継続であり、メンバーも前年度と殆ど同じであった。前年度の5回の研究会の総括（年報 Vol. 2 参照）の上になつて、今年度は共通のテーマに沿って行なつた。テーマは「母子関係」で、第1回の研究会終了後、参加者にアンケートを出して決めた。研究会の報告は別に印刷中であり、ここには発表題目と発表者のみをあげておく。

第1回

糸魚川：勝山集団のオスの行動について

第2回

母子関係 (1)

①室伏・井深・西邨：R.A. Hinde 達の研究紹介

②南：H.F. Harlow 達の研究紹介

第3回

母子関係 (2)

①岡野・佐木・坂本：ニホンザルの飼育集団における親子間の心理学的考察（多摩動物園サル山における観察）

②黒川：勝山野生ニホンザル集団における幼体と集

団成員との interaction

一生後10ヵ月間のメス2個体の場合—

- ③藤井：点マキ実験における母子関係
- ④西邨：高崎山自然群で観察されたニホンザルの母子関係
- ⑤森（梅）：母—子関係と個体差—幸島自然群における観察—

第4回

母—子関係（3）

- ①栗越：オスの一生に与える母—子関係の影響
- ②浅見：親行動と子行動の系統発達の考察
- ③南：ニホンザルの母子隔離と母子関係（文責 西邨顕達）

Locomotion と Posture についてのシンポジウム

期 日：1972年12月20日

参加者：約15名

ホミニゼーションの契機をなしたと思われる要因は多岐にわたるので、それぞれの要因をテーマとするワーキング・グループが結成されて、ほり下げた研究が行なわれることが望ましい。直立二足歩行については、ホミニゼーションにおける主要因の一つとして、その起源に関する研究が、いろいろの側面からすすめられているが、それらの成果の相互交換をはかるとともに、さらに多様な専門分野からのアプローチにより、新たな展望を得ることができるものと期待される。

このような目的から、ホミニゼーション研究会では、サブテーマの一つとして、locomotion と posture をとりあげ、下記のシンポジウムを開催した。

司会：近藤四郎・渡辺毅（京大・霊長研）

- 1. 霊長類の二足歩行
石田英実（京大・理）
- 2. 四足歩行と二足歩行の足底力
木村 賛（帝京大・医）
- 3. 座位に対する下肢骨の適応
馬場悠男（千葉大・医）
- 4. ヒトの起立とアシ
水野祥太郎（川崎医大）
- 5. 筋電図デジタル標示法による背筋機能の研究
古沢清吉（東大・医）
- 6. 筋負担からみた姿勢と生活
岡田守彦（京大・霊長研）
- 7. 生活と姿勢の問題
河合雅雄（京大・霊長研）
- 8. bipedalism と locomotion pattern—用語使用の検

討の必要性

岩本光雄（京大・霊長研）

9. bipedalism の意義

江原昭善（京大・霊長研）

討論者：猪口清一郎（昭和・大・医）、富田 守（お茶の水女子大・家政）、真野 範一（東京都神経科学総合研）ほか

シンポジウムの最後に locomotion と posture の研究推進のための今後の方針や問題点が討論された。その結果、今回の参加者を中心とするワーキング・グループ（世話人：近藤四郎・岡田守彦）を結成し、共同研究をふくむよりインテンシブなアプローチをめざすとともに研究会等により、討論を深めてゆくべきことが確認された。（文責 岡田守彦）

第3回ホミニゼーション研究会

期 日：1973年3月23～24日

参加者：約30名

第1日

発達の部

司会 岩本光雄（京大・霊長研）、水原洋城（日本モンキー・センター）

- 1. 人類における歯冠形態の発達
埴原和郎（東大・理）
- 2. 経験の効果について—比較行動学のアプローチ
井深允子（京大・霊長研）
- 3. いくつかの行動からみたニホンザルの発達
西邨顕達（京大・霊長研）
- 4. ニホンザルの社会的行動の発達
糸魚川直祐（阪大・文）

第2日

言語・コミュニケーションの部

司会 伊谷純一郎（京大・理）

- 1. 脳のはたらきと言語
河内十郎（専修大・文）
- 2. 言語の普遍的構造と生得説について
神尾昭雄（慶大・文）
- 3. 実験的行動分析からのアプローチ
浅野俊夫（京大・霊長研）
- 4. ニホンザルの性行動にみられる記号
榎本知郎（京大・理）
- 5. コドモのあそび仲間を通してみたニホンザルのコミュニケーション
森 梅代（京大・霊長研）
- 6. 視覚言語の獲得—チンパンジーの場合
室伏靖子（京大・霊長研）